

輸血を受けた方々・

血漿分画製剤を使用した方々の声



若木 瑞奈 さん

それまで、「輸血=事故のときに必要なもの」というイメージしか持っていなかった瑞奈(みいな)ちゃんのお母さん。瑞奈ちゃんは5歳で肝臓ガンを発症した。「手術や抗がん剤治療に伴い大量の輸血が必要となったとき、強いショックを受けました。」当事者にならないとわからない「ってこういうことですよ。同時に積極的に献血することが少なくなっていた当時の自分に対して後悔の気持ちが押し寄せました。献血という、誰かが命を分けてくれる行為があったからこそ、この子は今、元気に生きていられる。もしも「自分には何もできない」なんて考えている若い人がいたら、ぜひ献血に足を運んでほしい。あなたの中に流れるその血が、確実に誰かを救えるんです。」(談:若木 瑞奈(わかき みいな)ちゃんのお母さん)



三澤 恵利子 さん

「はじめての出産の際、準備万端で臨みましたが、医師も驚くほど突然の大量出血により輸血を経験しました。みるみるうちに手足が真っ白になり、パンパンにおくんでいき、半袖でも暑くてしかたないくらいの気温だったはずなのに、気づけば「寒い、寒い」と連呼していました。私にとって献血とは、文字どおり、血の通ったあたたかい贈りものです。あのとき、輸血用の血液がなかったら、私の手は冷たいまま。生まれた子の頭を撫でてあげることもできませんでした。いわばこの子は、みなさんの愛によって生まれた命。いろんな方の優しさとぬくもりに満ちた大切なプレゼントなんです。」



峰山 真彩 さん

5歳のとき、急性リンパ性白血病を発症。それ以来、お母さんと二人三脚のような形で闘病生活を乗り越えました。「お母さん、自分、死ぬんやろ？」ふと5歳の真彩が口にした言葉。おしゃまな女の子なんてね…髪が命だったんですよ。だから私に切られた日は、相当にショックだったみたいで、わんわん泣いていました。」抗がん剤の副作用で髪が抜け落ちることを心配し、お母さんが真彩ちゃんの髪を短く切り揃えた頃は、「次はどうなるんだろう」と不安にさいなまれていました。「娘にとって献血は、いのちのリレーみたいなもの。輸血パックには採血された場所が明記されており、ある時、そこに『沖縄』と書かれていて、遠く沖縄からはるばる海を越えて、うちの子を助けるためにやって来てくれたんだなって。献血してくださった方に、とにかく『ありがとう』の気持ちでいっぱいです。」(談:峰山 真彩(みねやま まい)ちゃんのお母さん)

私は血友病A重症の診断を受け、血漿分画製剤なしでは生きることさえ危うい状況にあります。

それでも今は、献血から作られる国産の血漿分画製剤を使うことで、大きな問題もなく日常生活を送れています。

献血をしてくださる多くの方々に感謝しています。
(匿名希望)

私の姪は3歳の夏に突然の髄膜炎で死の淵をさまよいました。

小さな命を救ったのは、献血から生まれた「免疫グロブリン」という血漿分画製剤でした。

献血をしてくださった方々の善意のお蔭で、姪は幼児教育を目指すバスケット好きな元気で優しい学生へと成長してきました。

献血を取り巻く多くの方々に、心から感謝しています。
(小野 玲子さん(叔母))

